

第5章. 新しい社会へ向かうために、デカルトから学ぶ

方法序説の第4部は、西欧近代主義の基盤となったデカルトの合理主義のハイライトだと言えるでしょう。特に「われ惟う、故にわれ在り」の一言はあまりにも有名です。「自由と科学的認識」の旗印の下に思考し行動してきたぼくの中には、高校時代に初めて触れたこの言葉が無意識の底流にあったのだらうと思います。これまでに語ってきたぼくの考動の様々な態様は、この言葉を軸に据えることによって説明が付きそうだと感じています。

デカルトは真理に到達しようとして、感覚が想像させる通りのものは何も存在しないと想定することにしました。前章では、彼が9年間の旅の中で、理性を働かせるだけではなく知覚を大いに働かせて多くのものを獲得し、多くのことを探り当て、演繹的思考を重視する合理主義哲学を打ち立てたことを説明しました。そのデカルトが、そのプロセスを否定するかのような姿勢を見せているのです。

この否定するかのような姿勢を決め込むという考動の中で生まれた疑問が、そういうことを考えている自分は一体何ものか、ということだったのです。この疑問に対する答を探す考動の中から生まれたのが、「われ惟う、故にわれ在り」だったのです。

即ち、自分は一つの実体であり、その本質ないし本性は「考える」ということだけにあって、存在するためにどんな場所も要せず、いかなる物質的なものにも依存しない、ということです。

しかし、この言葉が生まれる背景には、9年間の旅の中での彼の考動があり、そこから獲得された諸々の事象や概念が無くては、この言葉は生まれなかったでしょう。「惟う故に存在するわれ」は、知覚や働きかけという行動が無ければ存在することができなかった、と言ってもよいのではないかと感じています。

方法序説のこの部分については、脳科学者のアントニオ・R・ダマシオが、自著「デカルトの誤り」の中で異論を唱えています。

「我思う、ゆえに我在り」という、たぶん哲学史上もっとも有名なこの言明は、字句の通りに受け取るなら、心の起源そして心と身体との関係について、私が真実であると考えていることとまさに正反対のことを説いている。それは思考、そして思考の自覚が、存在の真の基盤であることをほのめかしている。

また知られているように、デカルトは思考を身体から完全に分離した作用であると

見ていたわけだから、まちがいでなくそれは、心、即ち「考えるもの」（レス・コギタンス）と、思考しない身体、即ち延長と機械的部品を有するもの（レス・エクステンサ）との分離を公言している。

しかし人類の夜明けのはるか前から、人間は人間だった。進化のある時点で基本的な意識が生まれた。その基本的な意識とともに単純な心が生まれた。心がより複雑になるにつれ思考の可能性が、そしてそれよりさらにあとに、言語を使ってより効果的に意志を伝達したり思考をまとめたりする可能性が生じた。

当時のわれわれにまずあったのは存在であり、思考するようになったのはそのあとのことだ。また現在のわれわれも、この世に生まれ育つとき、やはり存在からはじまり、その後思考する。われわれは存在し、それから考え、ひとえに、存在するゆえに考える。思考は存在の構造と作用によって引き起こされるのだ。

（ちくま学芸文庫「デカルトの誤り」より）

現代の脳科学の多くの成果を背景とした、もっとも真実に近いと判断されるダマシオの仮説から、以上のことが主張されています。この仮説を、ぼくも感動しながら読みました。存在という観点から見ますとダマシオの主張は真実だろうとぼくは受け止めています。

しかし、「我思う、ゆえに我在り」という命題は、“心が先に存在した”とか“心が存在の基盤だ”と言っているのではないとぼくは思っています。この命題は“私が私であること理由は、私が考えるということにある”という意味だと解釈するほうが妥当だろうと思うのです。

この命題を過去形にしてみますと“私は思った、だから私というものが存在したのだ”となります。“思った”とか“考えた”ことが、私という人間が存在した理由なのであり、身体という存在があっても何も考えなかったのであれば、私は存在したとは言えない、という意味だと捉えるほうが作為的にならないと思うのです。

ダマシオの主張するように、“思う”とか“考える”ということは身体が存在無しには考えられないことは真実でしょう。ぼくにとっては、デカルトの誤りと言うよりは、デカルトの哲学を基盤に置いて、医学や生物学を展開してきた科学者たちの誤りと言うほうが妥当に思えます。

デカルトは、真に確実であると判断できるこの命題に確実性を与えるものについて考察を深め、それが「完全な存在者である神」であるとの概念に到達しています。彼の生きた時代では、最高の概念は未だ「神」という言葉でしか表現できなかったの

だろうと思います。

デカルトの使っている言葉や文章を木目細かく捉え、彼以降に現れた思想をも考慮するといったことをしながら考察を進めていきますと、彼の使った「神」という概念が、今の時代に思い浮かべる“神”とは違うことが浮かび上がってきます。

カントの哲学では、認識の根源は「先験的理性」にあるとしています。弁証法的唯物論では、認識の根源は「法則的現実性」にあるとしています。現象学では、目の前にある現象を既存の枠組や先入見を駆使して解釈することを止め、全ての既存の枠組や先入見を外して現象そのものに直接志向することで本質に迫ることができるとしています。

かなり大雑把ですが、デカルトの言うところの「神」は、カントの先験的理性、弁証法的唯物論の法則的現実性、世界のあらゆる現象を支配している法則、といったものに近い存在だと捉えることができそうです。コーランを読んでいますと、アラールの神も同様の存在だと思えてきますし、中国古典の老子の語る「道」も同じように受け止めることができます。

ここで再びデカルトが「われ惟う、・・・」の命題に到達した過程を大まかに振り返ってみることにします。彼は30年戦争で旧教軍に従軍し、ノイブルクの冬営地に足留めされた頃に自分の学問への決心を固めました。その炉部屋で一日中一人で心ゆくまで思索にふける日々を過ごしました。

思索に浸りながら方法論を確立していく過程で、彼は一つの重要な結論に達しました。それは、その時まで受け入れ信じてきた諸見解のすべてを、自分の信念から一度きっぱりと取り除いてみるのが最善だ、ということでした。

理性の基準に照らすことを重要視するデカルトが、若い頃に信じ込まされた諸原理に、それが真かどうかを吟味せずに依拠するよりも、こうしたやり方によるほうが、はるかによく自分の学問を導いてくれると信じたのは当然のことでした。

この考え方は、「まずいっさいの科学的説明、とくに古典科学による説明を否認して初次的な世界経験に還ろう」、「記述することが問題であって、説明したり分析したりすることは問題ではない」、といった現象学の基本的主張と共通するものがあります。

現象学とは、ドイツの哲学者フッサールが1900年に発表した「論理学研究」に始まり、ハイデガー、サルトル、メルロ＝ポンティを経て深さと広がりを増してきた思想で、完結した一つの理論体系とか形而上学の類ではなく、思考のスタイル、あるいは研究対象に立ち向かう態度、と受け止められています。

「余計なものを全て排除し、事象そのものに直接向き合う」という一言が、その特性を端的に表していると思います。先述のデカルトのやり方は、この現象学の態度そのものだと受け止めることができそうです。

炉部屋での思索を経てデカルトは自分の方法論を確立し、その後の思考と行動のための規範を定めました。そして、先述のやり方を実践するという想いを達成するための行動に出たのです。それが、それまでのこと全てを考えた炉部屋に居続けるより、多くの人々と交流するほうがよいと考えて再び旅に出たことです。

9年間の旅の中で彼が努めていたことは、世界で演じられるあらゆる芝居の中で、役者よりむしろ観客になることでした。この旅の中でデカルトは多くの人々や事象に触れ、自分の精神に忍び込んでいたあらゆる誤謬を根絶し、自らの力で確信を得ること、そして曖昧な物事や事象を取り除いて、確固たる物事や事象を見つけ出すことを目指しました。

デカルトがこうした取組みの中で心掛けていたことがありました。それは、観察や実験の成果が不確実なものであっても捨て去らずに蓄積すること、そして、自分の定めた方法を使いこなす訓練をすることでした。

こうした取組みの軸となっていたこと、即ち、検討する命題の虚偽あるいは不確実性を、明晰で確かな推論によって明らかにしようとする彼の努力は、彼自身が感じるレベルでも相当うまくいったようでした。

ところが旅の9年間を過ごしたデカルトも、従来の哲学よりも確実な哲学の基礎を求めるには到っていませんでした。そんな中で彼の耳に飛び込んできたのは、「デカルトが既にそれをやり遂げている」という噂でした。

当時の通常の哲学よりも確実な哲学の基礎を確立する、という計画には多大の困難があることを予想していたデカルトには、そんな噂が立つことは思いもよらないことでした。しかし、この噂を耳にしたことが、デカルトに思い切ってこの難問に着手する契機を与えたのでした。

この難問を究めようとの願望を胸に抱き、知人のいそうな場所からは遠ざかって隠れ住む決心をしたデカルトはオランダに移りました。この国では、大勢の国民が非常に活動的で、他人の仕事に興味を持つよりも自分の仕事に集中しているようでした。彼はそのような人々の中で、都会の便利さを享受しながら、しかも人里離れた荒野にいるのと同じくらい、孤独で隠れた生活を送ったのでした。

オランダでのデカルトの思索と研究は真理の探究に向けられていました。その姿勢

は、ほんの少しでも疑いが残るものは全て誤りとして廃棄し、その後自分の信念の中に全く疑いえない何かが残るかどうかを見きわめよう、というものでした。

ところが、この姿勢を持つようと決めて間もなく、彼は重大なことに気付いたのです。それは、疑いを持っている自分、こうしたことを考えている自分、この自分は何ものかでなければならない、ということでした。

そこから生まれたのが「われ惟う、故にわれ在り（私は考える、ゆえに私は存在する）」という命題です。しかし、デカルトの探究はさらに続きます。この命題の確実性が何によるものかを考え続けるのです。

その探究の到達点は、「神があり存在すること、神が完全な存在者であること、私たちのうちにある全ては神に由来すること」でした。前にも述べましたように、ここで言うところの「神」は、現代の一般的に解釈されている神とは違います。

デカルトの探究から生まれたものと、彼の探究の過程における思考と行動とを総合的に捉えることを試みてみます。その方法は、知覚できる全ての現象の集合が表現する意味を探し求めるというやり方です。

現象とは、デカルトが到達した命題や観念、それに至る過程で彼が考えたこと、行動したこと、そういったことが成された環境や状況、関係が無いかもしれないが同時性を持って起こっていること、等々目の前に現れている全てのことです。こうした試みを通して、これまで表面に現れてはいない色々なことが浮かび上がってくるものです。

偉大なる命題「われ惟う、故にわれ在り」は、デカルトが最高の価値を置く理性による演繹的思考のみから生まれたのでしょうか。そうではなさそうです。彼は炉部屋でも、旅の中でも、オランダでの探究の中でも、きわめて多くの現象に触れています。そして、彼の理性に照らして何の疑いもなく受け入れるものと、何らかの疑いを感じるものとの認識をしています。そればかりか、そんな状態にある自分の存在は一体何なのだという疑問まで持ちます。

こうした多くの現象が織り成す状態をどう捉えるのが適切なのだろうか、という自己に対する問い掛けが彼の中には在ったはずで、意識の上でも、無意識下でも、彼はその答を追求していたのでしょう。その答こそがこの偉大なる命題だったと言えるでしょう。この偉大なる命題は、デカルトを取り巻く膨大な数と量の現象の集合が、表現している意味に他ならなかった、と言えるでしょう。

このように受け止めますと、偉大なる命題の背景にあるものが透けて見えてきます。“われ惟う”は絶対的に重要です。しかし、“われ惟う”が実体のある世界に位置付けられるためには、現象が知覚されるという基盤が必要です。

知覚は、相手や対象から何かを受け取ること、および相手や対象に何かを働きかけることで成り立ちます。自分だけではなく、全ての相手や対象も現象を知覚しています。即ち、知覚とは双方向の働きだと言えます。こうした知覚を表現する言葉としては、“交感”が適切かもしれません。

このように考えますと、“われ交感す、故にわれ在り”という仮命題を身近に感じることができます。デカルトの思考と行動のプロセスをたどってみても、この仮命題の存在を感じることができます。

デカルトの到達した「神」という観念は、理性による演繹的思考だけから生まれたとは言えないことは明白です。理性の働きが大きな役割を果たしていることに間違いはないのですが、ここにも理性を働かせるための基盤が存在したのです。

完全とは言いがたい自分、完全とは言いがたい諸現象、といったものを目前にして、自分が到達した命題の確実性を保証してくれる完全性を具えた存在を求めていたデカルトが到達した観念が「神」でした。それは、今の時代では「天地自然の法則」とか「全ての存在を司る法則」とか、弁証法的唯物論の「法則的現実性」といった言葉で表現されるものでしょう。

デカルトがこういった概念に到るまでの思考や行動にも“交感”が存在し、膨大な数と量の現象の集合が表現している意味の探求があったのです。デカルトの言うところの「神」とはそういう風にして生まれた意味だったのです。

今の時代でも物理学の法則や理論は、膨大な数と量の現象の集合が表現している意味として存在しています。一般的には本質という言葉が使われますが、意味という言葉の方が適切であるように感じます。例えば、素粒子を取り上げてみます。素粒子という本質は具体的に認識することはできません。しかし、多くの実験や現象を総合的に解釈して、素粒子という存在が認識される訳です。素粒子は本質というよりも“現象の集合が表現する意味”なのです。

デカルトが創り出した偉大なる命題「われ惟う、故にわれ在り」、そして“神”と呼ぶ概念、これらを命題や観念として捉えるだけではなく、これらの命題や観念に到達する過程の彼の思考と行動に向かい合うことを通して、以上のことが見えてきたのです。

即ち、デカルトにおける自己の存在は、“われ交感し、そして惟う、故にわれ在り”であり、デカルトにおける“神”の概念は“あらゆる現象を支配する法則”だと受け止められるのです。そして、理性による認識とは“現象の集合が表現する意味を読み取ること”だと言えるのです。

著書に在るデカルトの言葉や文章だけを捉えるのではなく、書き残されている彼の思考と行動をつなぎ合わせて、デカルトの思想を掘みにいって見た結果、以上のようなことにたどり着きました。

こうした思考と行動は、レベルの違いこそありますが、現代人の仕事や活動の中にも根付いています。それは西欧近代主義の展開の過程で定着してきたものです。それには、「われ惟う、故にわれ在り」という言葉の貢献が大きいと言えるでしょう。

しかし、この言葉は誤って受け止められますと困ったことをもたらします。自分の考えていることだけが正しいという硬直的な主張をする人たちが多くなるのも、その一つです。「われ惟う、故にわれ在り」という言葉の背後には、「われ交感す」という膨大な量の知覚と行動があることを忘れてはなりません。

「われ交感す」を自分の思考や行動からはるか遠くに追いやり、「われ惟う、故にわれ在り」だけを信奉することは、歪んだ思考や歪んだ行動を生むだけでしょう。現代社会の随所に見られる醜い歪みは、こうしたことから生まれているのです。

私たちが生きるこの現代社会で、いま必要とされているのは「われ交感す」なのです。「われ交感し、そして惟う、故にわれ在り」こそ、現代社会に復活させるべきデカルトの思想を言い表わしていると思います。

西欧近代主義を基盤として築かれた現代社会を省みて、新たな社会に向かうために、デカルトの思考と行動から浮かび上がる「われ交感し、そして惟う、故にわれ在り」を提唱したいと思います。